令和五年度西条市交通安全市民大会

交通安全作文優秀作品

西条市交通安全推進協議会

目次

○国安小学校　三年　野田（のだ）　采葉（ことは）　かくれているキケン　……　3

○多賀小学校　三年　森（もり）　杏菜（あんな）　わたしが心がける交通安全　……　5

○西条小学校　五年　岡松（おかまつ）　佑奈（ゆうな）　ながらスマホで歩行するとどうなるか　……　7

○氷見小学校　五年　杉森（すぎもり）　真衣（まい）　事故のない世界へ　……　9

○禎瑞小学校　五年　高木（たかぎ）　稀乃香（ののか）　登下校中に気をつけること　……　11

○楠河小学校　六年　西（にし）　諒晟（りょうせい）　事故のない安全な社会へ　……　13

○西条西中学校　一年　黒川（くろかわ）　千尋（ちひろ）　みんなの幸せを守るために　……　15

○河北中学校　一年　垂水（たるみ）　文汰（ぶんた）　「油断」　……　18

○丹原東中学校　一年　行元（ゆきもと）　かりん　「悲しみを減らすために」　……　20

○西条北中学校　二年　菅（かん）　わかな　「明日」を守るために　……　22

かくれているキケン

国安小学校　三年　野田　采葉

わたしは、友達と遊ぶとき、自転車に乗って移動することが多いです。自転車に乗ると、風を感じながら楽しく走れるので、わたしは自転車に乗ることが大好きです。

しかし、楽しいことだけではありません。なぜなら、自転車に乗ることは、事故にあったり、けがをしたりするこわさもあるからです。実際に、今までわたしが自転車に乗っていて、「危険だな」と感じた場面が三つあります。

まず一つ目が、急いでいて、スピードが出ているときです。スピードを出しすぎると、急には止まれなくなります。そして、車や人に当たってけがをしてしまうかもしれません。また、曲がり角から飛び出してきた車をよけきれず、ぶつかってしまうかもしれません。今までわたしも、スピードを出しすぎて、危険な目にあいそうになったことがありました。

二つ目は、ブレーキをかけるときです。ブレーキは、正しい順番を守らないと危険です。初めに、後ろタイヤの左ブレーキ。次に、前タイヤの右ブレーキというのが、正しい順番です。正しい順番を守らないと、タイヤがロックされたり、スリップしたりして、転んでしまうことがあります。最近、家族からそれを教えてもらった時、わたしはハッとさせられ、今までのブレーキの仕方を思い返しました。

三つ目は、友達と自転車に乗って走っているときです。この前、三、四人の友達と、一列に並んで自転車で走っているとき、気が付いたことがありました。それは、先頭の人がスピードに気を付けないと、後ろの人がとても危険だということです。先頭の人のスピードが速すぎると、後ろの人はついていけなくなり、あせってしまいます。反対に、先頭の人が遅すぎると、後ろの人がつっかえてしまい、自転車同士が当たって危険です。自転車の列の先頭を走るときは、みんなにとって丁度いいスピードを考えて、調整することが大切だと感じました。

このように、自転車には、たくさんの危険がかくれています。わたしが、これまで以上にこのことを

意識するようになったのには、あるきっかけがありました。それは、今年の五月に、わたしが通っている国安小学校で開かれた交通安全教室です。西条西警察署や、校区にある新町駐在所から、警察の方々や交通安全協会の方が、先生として来てくださりました。そして、自転車の安全な乗り方について、お話をしてくれたり、ビデオを見せてくれたりしました。

お話やビデオを通して、わたしが一番大切だと考えたことは、自転車を運転するときは、危険を予測しながら運転するということです。例えば、ビデオの中では、路上駐車の間から人が出てきたり、車のドアが急に開いたりする危険が紹介されていました。だから、わたしは、これから自転車に乗るときには、「そこの車から人が飛び出してくるかもしれない」「ドアが急に開くかもしれない」など、次に来る危険を予測しながら運転しようと思いました。

これから、夏休みが始まります。わたしは、友達の家に自転車で行ったり、みんなと自転車に乗ってどこかへ遊びに行ったりする予定です。自転車に乗ることは楽しいけれど、いつも危険がかくれていることを心に留めて、気を付けて自転車に乗りたいです。

わたしが心がける交通安全

多賀小学校　三年　森　杏菜

わたしは、自転車に乗ることが大好きです。それは、すぐに友達に会いに行くことができるからです。自転車に乗って、待ち合わせ場所に行くとき、「今日は、何をして遊ぼうかな。」とわくわくします。この時間が一番楽しいです。

わたしが遊びに行くとき、お母さんは、毎回

「車に気を付けてね。」

と言って見送ってくれます。私の家の近くには、国道という大きい道路があって、いつもたくさんの車が走っています。お母さんは、暑い夏の日も寒い冬の日も、私がその道路をわたるまで、見ていてくれます。

「どうして、いつも見送ってくれるの。」

と聞くと

「杏菜ちゃんが、事こにあわないように願っているからよ。」

と教えてくれました。お母さんは、わたしのことを大切に思ってくれているのだな、とうれしくなりました。

ある日のことです。道路をわたろうと思い、止まってかくにんすると、向こうの方に車が見えました。

「まだ遠くだから、だいじょうぶだよね。わたれる。わたれる。」

そう思って進もうとしたとたん、車が目の前を通り過ぎていきました。わたしは、びっくりして立ちすくんでいました。そのままわたっていたら、ぶつかっていたかもしれない。

わたしはぞっとしました。心配そうなお母さんの顔を思い出しました。もし、わたしが事こにあっていたら、お母さんも家族もすごく悲しむだろう。大好きな家族にそんな思いをさせたくない。何より、わたし自身が事こになんかあいたくない。

大好きな自転車に乗って、大好きな友達と遊んで、大好きな家族と楽しくすごしたい。交通事こは、そんなわたしの「大好き」をうばってしまうかもしれないのです。

わたしが交差点で車を待っているとき、止まって

くれる車もあるし、止まらずに走っていく車もあります。信ごうきがない交差点では左右を見て、たとえ車が遠くにいたとしても、運転手がわたしに気がついて止まってくれるまで、しっかりと待ちたいと思います。また、信ごうきがある交差点でも、青になったからとすぐにわたろうとせず、やっぱり車が止まったのをかくにんしてからわたろうと思います。

えがおで

「お母さん、ただいま。」

といつも言えるように。大好きな自転車に乗って、いろいろなところに行って、友達とたくさん遊べるように。これからも、交通安全に心がけていこうと思います。

ながらスマホで歩行するとどうなるか

西条小学校　五年　岡松　佑奈

スマートフォンは、上手に使うととても便利なものだ。インターネットを利用するときには、パソコンよりもスマートフォンを使う人も多いと思う。日常生活で、便利なスマートフォンが急速に普及していく中で、歩きながらスマートフォンを触っている人をよく見かける。当然、歩道や横断歩道ではスマートフォンを見ながら歩いてはいけない。交通ルールの違反にもあたることは知っている。でも、見たくなる気持ちは分かる。私もスマートフォンを触っているうちに、ついつい夢中になりすぎることがある。

「どうして、ながらスマホはいけないのか。」

私は、改めて自分で、考えてみることにした。スマートフォンに集中しすぎると、周囲の危険に気付かないことがある。自転車や車に乗っている人に必ずしも避けてもらえるとは限らない。もし、ながらスマホで歩いていると、走っている自転車や車に気付かず、大事故につながるかもしれないと感じた。それだけでなく、自転車や車に乗っている人や他の歩行者を巻き込み、怪我をさせてしまうかもしれない。スマホを見ながら歩いたりしないで、しっかり前を見て歩けば、そんな事故は起こらないだろう。

次に、ながらスマホはどれだけ危険なのか家の中でスマホを持って体験してみた。歩き始めてすぐに、かべや机にぶつかりそうになった。階段があることにも気付かなかった。これがもし、歩道だったらと考えると怖くなった。このようにながらスマホはやはり危険であることが分かった。ながらスマホをせずに歩けばみんなが安全に過ごせるだろう。

ながらスマホによる事故はどれくらい起きているのだろうか。体験を終えて気になった私は調べてみることにした。

警察庁によると、令和四年度におよそ七百件もの事故が起こっていた。思っていたよりもとても数が多く、驚いた。毎日二件くらいの頻度で、全国のどこかでこのような事故が起こっている。事故として扱われている数はこれだけでも、幸い事故にはつな

がらなかったとしても、ながらスマホで歩いている人はもっともっと多いのだろうと感じた。

ながらスマホが原因で事故に合うと、すぐ直るような小さな怪我だけではすまないこともある。最悪の場合、死んでしまうことも考えられる。そんなことになると自分一人だけではなく、家族や周りの人も悲しむ。自分の命は自分一人だけのものではない。死んでしまったらどんなに戻りたいと思っても、戻ることはできない。誰かに会うこともできない。だから、みんなの命を大切にするために、悲しい事故をなくすために、ながらスマホは絶対にしてはいけない。友達や家族と楽しく遊んだり、話をしたり二度とできなくなる。それは、だれにとっても悲しいことで、あってはいけないことだと思う。

歩道を歩くときは、スマホを見ない。簡単なことだと思う。こんな簡単なルールを守らなかったことが原因で大好きな人たちと会えなくなるなんて嫌だし、悲しいと思う。事故を起こさないためにも、私は絶対にながらスマホはしない。そして誰一人しないようになることを願って、身近な人にも伝えていきたい。

事故のない世界へ

氷見小学校　五年　杉森　真衣

わたしの父と祖母は、事故にあった事があります。父が乗っていた自転車の前輪とバイクがぶつかりました。自転車は飛び、バイクに乗っている人は転がっていきました。だけど、バイクの人はすぐに、

「大丈夫ですか？」

と心配をして声をかけてくれました。けがはしていなかったので本当に良かったです。祖母は、自転車でバイクとぶつかり、上の前歯三本が折れました。祖母は今は仮歯です。身近な二人の事故の経験を聞いて、私から運転手にお願いしたいことがあります。

一つ目は、せまい道路でスピードを出しすぎないことです。広い道路を使わずに、せまいぬけ道をものすごい勢いで通っていく車がいます。こんなにせまい道なのにそんなにスピードを出していたらあぶないなと思います。だから、広い道路を使ってほしいと思います。わたしも、せまい道を自転車で走っていたとき、突然車が来てとてもびっくりしたことがあります。わたしが住んでいる校区は、せまい道路が多く、信号機や横断歩道も少ないので、車を運転する人は特に気をつけてほしいです。

二つ目は、交通ルールを守ってほしいことです。運転する人も道路や歩道を歩く人も守らないといけないルールがたくさんあります。運転する人に絶対にしてほしくないのは「飲酒運転」「信号無し」「ながら運転」です。歩行者も、信号無しをしたり「右、左、右」を見ずに道路をわたったりしないでほしいです。少しのルールい反が、交通事故を引き起こし、命を落とすことにつながります。だから、交通ルールは絶対に守ってほしいです。

この世の中には、守らないといけないと分かっていても守れない人がいます。「ちょっとならいいか」「だれも見てないからいいや。」「みんなもしているから。」わたしは大人でも子どもでも、そういうことは絶対にしてはいけないと思うし、している人を見かけたら注意したいと思います。そうしたちょっとの気のゆるみが事故を起こしてしまうと思います。みんなが交通ルールやマナーを守って、事故の

ない世界になってほしいです。

登下校中に気をつけること

禎瑞小学校　五年　髙木　稀乃香

わたしが通っている学校は、登校はんごとにわかれて登校します。わたしが低学年のころは、登校はんで集まって登校する意味をあまり考えたことがなく、ただみんなで集まって登校するだけだと思っていました。しかし五年生になり、はん長をすることになって、毎朝登校するときにはんのみんなが安全に学校に行くためにはどうしたらよいか、交通ルールの大切さについて考えるようになりました。

まず、登校するときにきけんな場所はどこか、そこでどういうことに気をつけなければいけないのかを考えました。

一つ目の危険な場所は、家の前の細い道から車が通る道に出るところです。決して飛び出しをせず、左右を確にんして出ることが大切です。そこは、以前小学生の男の子が自転車で飛び出して、車とぶつかるという事故が起きた場所だと母から聞きました。わたしが毎日通っている道でそんなこわい事故が起きたことがあると知って、特に気をつけなければならないと思いました。

二つ目の危険な場所は、交差点です。交差点では左右だけでなく、前後も確にんすることが大切です。はん長になる前までは左右しか確にんしていませんでした。しかし、後ろから来た車が右折する車だった場合、事故が起きるかもしれません。また、その交差点では、「止まれ」の標識を無視して通りぬけていく車がいるので、昔から事故が多く、実際に家族も事故にあったことがある場所です。幸い家族にけがはなかったけど、もしかしたら大きな事故になっていたかもしれないと考えると、その交差点はとても危険な場所だと思いました。だからよく確にんして、みんなが安全にわたれるようにしたいです。

三つ目の危険な場所は、歩道や路側帯のない道です。そこでは、なるべく道のはしを歩き、車が来たら立ち止まって車が通り過ぎるのを確にんしてから歩くことが大切です。その道はせまく、車と接しょくするかもしれません。また、歩道や路側帯がある場所でも、農作業をするためのトラックなどが停ま

っているときがあります。そのときは、道路に出ないといけないので、特に注意して歩くようにしています。

このように、通学路には危険な場所がたくさんあり、交通ルールを守らないと事故につながる可能性があると思います。これからも大じょうぶだと思いこまず、みんなが安心して登校できるようにしたいと思います。

また、多くの地いきの人が見守りをしてくれたり、登校はんに歩いてついてきてくれたりなど、わたしたちが安全に学校に登校できるように見守ってくれています。これは、本当にありがたいことだと思います。

わたしもはん長として、はんのみんなが安全に登校できるように交通ルールをしっかりと守り、一つでも交通事故を防ぐことができたらいいなと思います。

事故のない安全な社会へ

楠河小学校　六年　西　諒晟

ぼくは、二才になる前のクリスマスに、サンタさんにペダルなし自転車をもらいました。それは、姉が自転車に乗っているのがうらやましかったからです。ペダルなし自転車を練習する時は、父や母が必ずヘルメットをかぶらせてくれました。それは、転んだ時に頭をぶつけると大変なことになるからです。乗り始めは、スピードが出るとこわいので、ゆっくり足でこいでいましたが、だんだん慣れてくると坂道などでスピードを出して乗っていました。だから、父はいつも

「きちんと前を見て！あまりスピードを出すとあぶないよ！車が来たら止まって！」

と教えてくれました。小さいころは、一人で自転車に乗ることはなく、必ず誰かが近くで見守ってくれましたが、小学生になると、一人で自転車に乗ることが増えてきました。

ある日の放課後、ぼくは祖父のいる田んぼに自転車で向かっていました。坂道でスピードが出ている時に、後ろが気になってふり返りました。そのしゅん間、川に落ちてしまいました。ぼくは、びっくりして頭が真っ白になりました。ヘルメットをかぶっていたので、頭は無事でしたが、手と足にすり傷をおいました。血がたくさん出て、とてもいたかったです。たまたま祖父が通りかかって、自転車とぼくを引き上げてくれましたが、祖父が来なかったら、ぼくはどうしようもできず、ただ泣いていただけだったと思います。ぼくは、自転車に乗ることにだんだんと慣れてきて、小さい時に教えてもらったことも忘れ、油断していたのだと思います。ただ、ヘルメットをかぶることだけは習慣になっていたので、頭をぶつけてもけがをすることはなく、「無事でよかったなあ。」と思いました。ヘルメットに命を救ってもらったからこそ、ヘルメットをかぶることは本当に大切なことだと改めて学ぶことができました。

今年の四月から、自転車に乗る全ての人に対し、ヘルメット着用の努力義務がかせられています。それは、自転車の交通事故でなくなられた人のうち、

約六割が頭部にち命傷をおっているからです。また、ヘルメットをかぶっている人とかぶっていない人では、かぶっていない人の方が約二、三倍もなくなる可能性が高いそうです。このことから、頭を守ることは本当に大事だということがわかりました。最近では、大人もヘルメットをかぶっている人が増えてきましたが、まだまだかぶっていない人の方が多いと思います。それに、ヘルメットをかぶらず、スマートフォンをさわりながら自転車に乗っている人も時々見かけることがあります。「あっ、あぶないな。」と思いますが、ぼくは注意をすることができません。

警察の方々は、ふ段からよく交通ルールについて教室を開いたり、注意をしてくれたりしていますが、ルールを守らない大人や子供がいることはとても残念だと思います。地域や学校で話し合い、協力しながら、一人一人が安全に生きていけるよう、一つしかない命を大切にしなければいけないと思います。ぼくもしっかりと交通ルールを守り、自分がお手本になれるように心がけたいと思います。そして、みんなが交通ルールを守って、事故のない安全な社会をつくっていきたいです。

みんなの幸せを守るために

西条西中学校　一年　黒川　千尋

私には、交通安全について深く考えた出来事がある。それは、塾の帰り道にある交差点でのこと。私は信号が青になったので、歩いて横断歩道を渡っていた。ちょうど渡り終えた頃だ。後ろから、車のクラクションの音が聞こえた。何かと思い、私は後ろを振り向いた。すると、私の後ろで横断歩道を渡っていたのは、スマホを片手にイヤホンを付け自転車に乗った高校生だった。ヘルメットも被っていなかった。信号はもう赤になっていた。だから、車の運転手はクラクションを鳴らしたのだろう。高校生は、別にたいしたことでもないというふうで、その場を立ち去ってしまったが、私はかなりびっくりした。

家に帰って私は、そもそも自転車に乗りながらスマホを使うことが、交通違反にならないのだろうかと思い、調べてみた。そして、分かったことは、まず一つ目に、ほとんどの都道府県が、携帯電話を使用しながら自転車で走行することを、条例で禁止しているということだ。スマホを使用しながら走行すると片手運転になり、目や耳も携帯電話に注意が行くので、事故を起こす可能性が高くなる。これは危険行為なのだ。

私は、スマホを使いながら自転車に乗ったことはない。しかし、調べていくうちに、自分も当てはまるのではないかということがあった。それは、自転車は左側を通行するということだ。私たち中学生も毎日のように乗っている自転車だが、実は自転車は軽車両の扱いになっている。そのため、左側を通行する。小学校の頃、「歩行者は右側、車は左側」という言葉をよく聞いた。小学生の私には、なんで右側を歩かなければならないのか疑問だった。しかし、車や自転車など車両が通る側と、歩行者が通る側をきちんと分けることで、接触事故は減少する。私も、何となく自転車に乗っている時にいつもの癖で、右側を通ることがあるが、それはきちんと改めなければならないことだ。

二〇二三年四月から、自転車に乗る時のヘルメット着用が全国で義務化した。それまでは、十三歳未

満の幼児や児童のいる保護者に対して、ヘルメットを着用させるよう努力義務があったが、この時から、自転車を利用するすべての人が対象となった。自転車乗車中の交通事故による死亡事故を減らすのが狙いだ。自転車に乗っていて亡くなられた方の約六割が頭部に致命傷を負っている。だが、ヘルメットを被ることで、脳への衝撃は十七分の一に減るそうだ。私は、ヘルメットは絶対に被るべきだと思っているし、学校への行き帰りだけでなく、塾に行く時も買い物に行く時も、友達と遊びに出かける時も、自転車に乗る時は必ずヘルメットを被っている。母の話だと、母が高校生の頃は、高校生はヘルメットを被らないのが当たり前だったそうだ。「今思えば、中学生の時に被っていたヘルメットを、高校生になったら被らないなんておかしな話だと思うけど、その時は、まさか自転車に乗る人すべてがヘルメットを被らなければならない時代がくるなんて、思ってなかった」と母は言う。今の時代、交通事故を防ぐための規則や呼び掛けやイベントがたくさんできたことを、母はうれしく思うそうだ。

母がそんなふうに思うのは、母には高校三年生の夏に、交差点でトラックとぶつかる事故に遭った経験があるからだ。その時は、びっくりして声も出なかったほど怖かったと言っていた。幸い、足を打撲する程度の怪我で済んだのだが、もし、頭を打っていたらどうなっていたのか……。記憶障害になっていたかもしれないし、歩けなくなっていたかもしれない。脳は一度傷つくと再生できない。治療も難しい。母の生きる道は、変わってしまっていたかもしれない。私だって生まれていなかったかもしれない。私は、ヘルメットは自分を守るための応援グッズだと思っている。

しかし、私たちの地域の様子を見てみるとやはりヘルメットを必ず被っているのは小・中学生で、高校生のノーヘル姿を時々見ることがある。大人は、被っていない人の方が圧倒的に多い気がする。昔、被らなくてもよかったヘルメットを被ることに抵抗があるのだろうか。髪型は崩れるし、夏は暑いし、面倒くさい。慎重に乗っていればヘルメットなんてなくても大丈夫。そんなふうに思っているのだろう

か。しかし、それは間違いだ。ヘルメットは絶対に被るべきだ。事故に遭ってからでは遅いのだ。

何が起こるか分からないこの世の中。自分が交通事故に遭わないように気を付けていても交通事故は起こる。だから、私たちは自分に何ができるか考え、正しい知識を持ち、正しい行動をしなければならない。そして、周りの人に伝えていく勇気を持ち、伝えていかなければならない。自分を守るために。みんなの幸せを守るために。

「油断」

河北中学校　一年　垂水　文汰

僕は中学生になって、交差点や角で一度絶対に止まると言うことを、気を付けるようになった。なぜなら、僕がこのような経験をしていたからである。

ある日のサッカーの帰り、僕は早くゲームがしたくて、自転車でとても急いで帰っていた。そして、家の前の角まで来たとき、カーブミラーも見ずに速いスピードで角を曲がろうとした。向こう側から車が来ていることも知らずに…。車と衝突しそうになり、とても怖かった。幸い、車は速度を落としており、僕も急ブレーキをかけたので衝突は避けることが出来た。運転手の人は、ぶつかりそうになった直後は驚いていたが、その後は少し怒っている様子だった。僕は車に向かって頭を下げた。その時僕は、運転していた人に対して申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

次の日、自分の部屋で昨日のことを思い出していた。今になって考えてみると、とても一瞬の出来事だなと思った。でも、もし車が速いスピードで角を曲がっていたら、僕が急ブレーキをかけるのが少しでも遅かったら…。そう考えると、背中がゾッとしとても怖いと感じた。そしてその瞬間、僕の頭の中に「油断」という二文字が浮かんだ。インターネットで調べると、交通事故の発生場所の割合は交差点での事故が半分以上を占めており、交通事故の発生理由は信号無視とブレーキとアクセルの踏み間違いが多く、運転者や歩行者が油断することにより、事故が起きていることが近年増えていることを知った。

このことから僕は、交通安全に興味を持ち、インターネットや本を使ってもっと交通安全ついて調べることにした。すると、愛媛県で行っているある取り組みを知った。それは、「あんしん歩行エリア」という取り組みである。安心歩行エリアとは、事故が発生しやすい地区において、安全な通行経路が確保されたエリアのことで、県内では十五カ所、東予だけでも五箇所もあんしん歩行エリアとして指定されている。内容としては、危険な交差点の改良や信号機等の整備。歩行者空間の整備などがある。僕は、

この取り組みを通じて、もっと愛媛県の交通事故が減っていってくれたらなと思う。

僕はインターネットや自分自身の経験から交通事故をなくしていくためには、歩行者も運転者も油断しないと言うことが大切だと学び、我が愛媛県においても様々な交通安全のための取り組みが行われていることを知った。この経験を生かして、これからも、交差点や角で一度絶対に止まるという事を心がけ油断しないために、交通安全についてもっと学んでいきたい。

「悲しみを減らすために」

丹原東中学校　一年　行本　かりん

私はこれまで、たくさんの事故や事故になりそうだった話を聞きました。道路を車で通るときも、たまに事故現場を見ます。改めて考えると、それだけ身近に危険が潜んでいると実感します。

自分はどうだったか考えました。つい最近、死角になっているアパートの駐車場の前を通りました。車の音が聞こえなかったという理由で止まらずにそのまま進んだら、車が出てきてぶつかりそうになりました。ほんとに死ぬかと思ったし、怖かったです。よく見て確認しておけば、こういう事にはならず、相手の方にも迷惑がかからなかったと思います。左右を見て、安全を確かめることの大切さに気づきました。

もう一つ危険だと思った話があります。これは祖母から聞いた話で、私の叔父が子供だったときに車の中でトイレに行きたくなったそうです。そのため、祖母は早く家に着くようにスピードを出し過ぎてしまいました。それが原因で警察に止められ、叔父はなかなかトイレに行けなかったそうです。どんなに急いでいても、事故にあったらそれどころではなくなります。もし相手側がいたらその人も怪我をしたり最悪亡くなってしまったりするかもしれません。自分も大怪我をして一生後悔する可能性もあります。それを防ぐために、決められたスピードを守り、安全運転をしようと思いました。

私はまだ車の運転はできません。でも、実際に自転車という車に乗って毎日登下校などをしています。だから、「自分は自転車だし、車に乗る運転手の安全確認は覚えなくていいや。」などという考えは捨てます。将来の自分や周りの人のために今から交通ルールを学び、事故や怪我をなくす考えをどんどん伝えていこうと思いました。

私の曾祖母は、私が生まれる前に亡くなりました。家の近くで草引きをしていたところ、車が来てお互い気づけずにぶつかってしまったそうです。かがんでいたのもあり、車の運転手は見えなかったのかもしれません。でも、ちゃんと後ろを見ていれば、こ

の事故は起きず曾祖母はもっと長生きできたはずです。運転手側も責任や罪悪感などでしんどくなったり、これからの生活でずっとこの時のことを背負っていかなくてはならなかったりすることがなかったはずです。一瞬の出来事で命を奪ってしまったら、奪った方も奪われた方も周りも悲しくなります。そんな悲しみが少しでもなくなればいいなと思いました。

そして、自動車や自転車は年々便利なものになっています。しかし、その便利さの裏には人の命も落とすくらいの怖い力があることを、世界中の全員に忘れないでほしいです。その怖い力のせいで悲しんだ人もたくさんいるからです。交通にはちゃんとルールがあり、それをみんなが守っていれば事故は起きないようになります。「あのとき左右を見ていれば」「あのときスピードをもう少し落としていれば」などの後悔が残らないように、一人一人が気をつけるといいと思います。

私は、この作文を書くために色々調べたとき、一年間に交通事故で亡くなる人が、三千人以上もいると知りました。一年だけでそんなに多くの人がいなくなってしまうなんて、考えただけで辛いです。この人数を減らすために私に何ができるでしょうか。まずは、そのことを全員が考えるべきだと思います。私は何よりも思いやりを大切にしたいです。せまい道はゆずり合ったり、先に行かせてもらったときは会釈をしたりといった当たり前のことから始めます。こういった礼儀がなく、相手を不快にさせると、あおり運転や暴言につながるかもしれないからです。交通安全のルールに関心を持つ人がもっともっと増えていくと嬉しいです。そして、いつか交通事故がゼロの世の中を作っていきたいと思います。

「明日」を守るために

西条北中学校　二年　菅　わかな

三十万八百三十九件。この数字が何を意味するものかあなたには分かるだろうか。この数字は二〇二二年に発生した事故の件数である。これを聞いて「そうなんだ。」と思うだけで自分も事故に遭うかもしれないと考える人は少ないだろう。私も今まで事故に遭う確率なんて低そうだから大丈夫。そう思っていた。でも、今は違う。

私は過去に事故を体験したことがある。車同士の事故だった。いつもどうり家族で車に乗って楽しく休日を過ごしていた。その時は事故のことなど一つも考えていなかった。信号機のない横断歩道を渡ろうとしていた大人がいたので車を止めた。すると、突然後ろから「ドンッ」と大きな音を立て車全体に強い衝撃が走った。あの衝撃を忘れることはないだろう。私は一瞬の出来事に頭が追いつかなかった。後ろを振り向くと車が真後ろにヘッドライトをチカチカと光らせながら停車していた。ニュースなどでしか見たことない景色に私は鳥肌が立った。車の後ろを見ると、ボコボコにへこんでいた。長年乗っていた車だったので悲しかった。相手の車は小さめの車だったため車がへこむだけで済んだが、もしもトラックなどの大きな車だったら、私たちに「明日」はもうなかったかもしれない。事故に遭った人が全員無事だということは当たり前ではない。そう私は感じた。相手の人は前を見ていなかったからブレーキをかけれなかったと言っていた。こういった不安全行動で誰かの楽しい時間を削ってしまうかもしれない。それは私も一緒だ。私たち学生も自転車に乗っている。便利だが不安全行動をしてしまったら事故を起こして誰かとぶつかり、自分が加害者になってしまうかもしれない。事故は思った以上に身近なものなのだ。不安全行動だけでなく、今回の事故では信号機のない横断歩道も事故の原因だと私は思う。信号機がないことで「ここは横断歩道だ。」という意識が低くなり周りをよく見ずに通り過ぎてしまって事故につながる危険性が高まるかもしれない。だから、交通整備がしっかりしていないところは自分

の目でよく確かめ、安全運転を一人一人が心がけてほしい。

実際に事故を体験して交通安全への意識が大きく変わった。自分は大丈夫、事故なんて起こらないと正直思っていた。だがそれは間違った考えだ。そのような考え方をしている人がいたらすぐにやめてほしい。自分の身に何かあってからでは遅い。だから今、事故の怖さを知り、意識を高めていくことが事故を無くしていくための一歩だと私は考える。そうすると三十万八百三十九件という数字は減っていくだろう。一人一人の命を守るため、「明日」を守るために他人事とは考えずに、真剣に交通安全と向き合ってほしい。